



平成21年11月18日  
川崎市立柿生中学校  
郷土史料館情報・研究誌  
第17号

柿生「鉄」の系譜 III 鶴見川文化を探る  
—— 鶴見川流域の鉄の痕跡を探る ——

校長 板倉 敏郎

前号では、タタラの原料となる砂鉄がなぜ鶴見川流域で採取されるのかということと神奈川県内の砂鉄産地について考えてみました。

今回は、鶴見川流域に分布する鉄に関する痕跡を辿ってみました。

1987年に発掘された西ノ谷遺跡(横浜市都筑区南山田2丁目)からおびただしい数の鉄製品が発見されました。

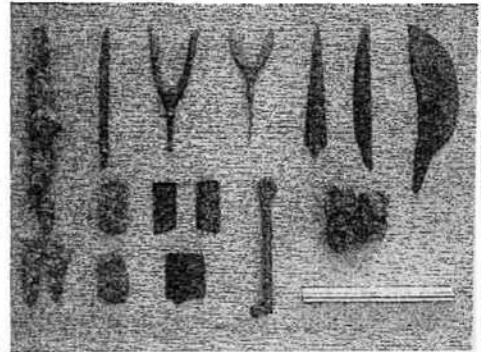
ここは、鶴見川支流の早湊川流域にあり港北ニュータウンの開発で発見されたもので市営地下鉄センター北駅の近くにあります。時代は、11世紀から12世紀にかけてのもので平安時代の後期の鍛冶遺跡でした。発見された鉄製品は、矢尻、馬具、鉄(は)み、刀子(とす:切)、武具、鎌、鋏などが多数発見されました。

しかし、ここで使用されていた鉄材は、この遺跡から700メートル東に鎌倉街道(中継道)があることから、他の離れた地域から鉄材を調達したのではないかと結論付けています。しかし、早湊川流域に砂鉄の確認がなかったとしても鶴見川本流の砂鉄の確認については、十分なされたかについては、平成7年の研究報告書には書かれていません。

ここでひとつ気になることは、この遺跡周辺1500メートル以内に「杉山神社」3社(中阿・茅崎・圃)があります。更にその先には、荏田の「剣神社」も見られます。以上の点からもこの西ノ谷遺跡の鍛冶工房は、杉山神社と強いつながりを持ちながら発展したのではないかと考えられます。



(横浜市青葉区の鉄神社)



(西ノ谷遺跡から出土した鉄器類)

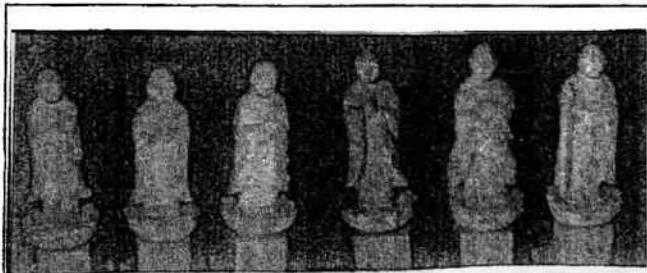
このような視点で考えますと、横浜市鶴見区岸谷の杉山神社とその階段下から出土した古墳時代の鍛冶遺跡、そして西ノ谷遺跡の鍛冶遺跡と周辺の3つの杉山神社、あるいは横浜市鉄(くろがね)町付近の鶴見川からたくさん採取される砂鉄と鉄神社(杉山神社と詔)など、「鉄」と「杉山神社」との深いつながりが浮き彫りになって来ると思いませんか。

したがって今後の調査では、杉山神社周辺に鍛冶遺跡が発見されることもありうるのではないとも考えられます。今後の調査と研究に待たれるところであります。

シリーズ 「麻生のルーツを探る」 第16話

岡上 東光院 その1—行基伝承—

古代、都筑（鶴見川水系）の二大古刹は王禅寺と東光院といわれています。ともに真言宗のお寺ですが、弘法大師が真言宗を開いた大同元（805）年より歴史（縁起）は古く、王禅寺は孝謙天皇のご霊夢（前々稿）、東光院は行基伝承（750年頃）があり、特にこの東光院は前稿「阿部原の廃寺」が関わって鶴見川上流の仏教文化を知る



岡上東光院六地藏

上で重要な寺となっています。

残念なことにこのお寺も王禅寺同様に幾度かの火災にあい、千古の寺伝、秘仏を失ってしまいました。したがって寺の歴史を知るには、寺の縁起、口碑、伝承に依るしかありませんが、新編武蔵風土記稿には、「本尊不動立像長三尺許ナルヲ安置ス、開山開基ヲ詳

ニセスト云ヘト天正ノ頃マデ十一代ニ及フトヒ、古キテラナルコト知ヘシ」と記述され、皇国地誌は、「和銅年間僧行基が東国下向の際、毘沙門天の像を得て一堂を構えた」と寺の縁起を記しています。

東光院の行基伝承は次の通りです。「行基菩薩が東国下向の頃、鶴見川は大河でした。河の向こうに夜ごと光るものがあるので、菩薩は筏に乗って河を渡られ岡の北の方を掘らせ給うと毘沙門天の尊像を得た。この像は七珍万宝を降らして貧民を救う不思議な尊像なので草庵を結んだ」（柿生岡上郷土史）というものです。

そこで考えられることは、前稿「阿部原廃寺」との関係です。和同年間というと聖武天皇の国分寺令（741年）とほぼ同じ頃です。古来岡上の地は縄文時代よりの遺跡が多く、奈良・平安時代を代表する丸山遺跡などこの頃ひとつの文化を持つムラを構えていました。僧行基は、律令制度に苦しむ農民を救おうと民間布教に努めた高僧で、農民から菩薩と崇められていましたので、ムラの小豪族と農民によって建立されたとされる阿部原廃寺は、このムラの行基信仰に依るものとも考えられ、後に四葉連華文鎧瓦の伽藍となり古東光院となっていくと思うのですがいかがでしょうか。

そのことは、東光院には末寺が9ヶ寺あり、その中7ヶ寺が鶴川にあることから証明できますが、阿部原の廃寺跡が確実に解明されていない現在、古東光院は厚いベールにつつまれているということになります。

文、小島一也氏



兜跋毘沙門天立像

第14回カルチャーセミナー報告(9月17日実施)

「江戸初期の墓石から見えてくること」

9月17日(木)、本校において郷土史家の中西望介先生にご講演をいただきました。今回は「江戸初期の墓石から見えてくること」と題し墓石の種類、形態、文様、基礎部の蓮弁紋の様式などにより年代や人々の生活、身分、支配層の様子などについて判ることを詳しくお話され、柿生・岡上の墓石から江戸時代初期の郷土の様子についてお話いただきました。



(成翁寺：殿様の墓・富永重吉五輪塔)

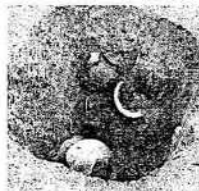
第15回カルチャーセミナー報告(10月24日実施)

「上ノ原遺跡第3次発掘調査見学会」



(熱心に耳を傾ける参加者)

8月から行なわれています早野戒翁寺横にあります「上ノ原遺跡」は、現在、第3次発掘調査が行なわれています。当日は、講師に川崎市教育委員会の栗田一生氏と直接発掘調査に当たっていらっしゃる吾妻考古学研究所長の大坪宣雄氏に約1時間半にわたってご説明いただきました。約50名の参加者は古墳時代から平安時代にかけての住居址を中心に見学しました。中には、焼け跡と思われる住居址があり、突然の火災であわてて逃げた様子がありありと判るものもあり大変興味深い見学会でした。



(貯蔵穴の中の土師器)

第16回

カルチャーセミナー開催のご案内

- 1、期 日 平成21年11月26日(木) 午後6時より
- 2、会 場 柿生中学校 2階 視聴覚室
- 3、講 師 松崎 稔 氏 (町田市自由民権資料館職員)
- 4、テーマ 「町田の自由民権運動と柿生」

第17回

カルチャーセミナー開催のご案内

- 1、期 日 平成21年12月4日(金) 午後5時30分より
- 2、会 場 柿生中学校 2階 視聴覚室
- 3、講 師 増淵 和夫 氏 (幸図書館勤務)
- 4、テーマ 「柿生・岡上の古代遺跡と自然環境  
～地質・気候より探る～」



郷土  
史料館

# 寄贈品から歴史をひもとく 「柄鏡」の謎

先般、「柿生文化 16号」で紹介しました宗像俊龍氏寄贈の江戸期の柄鏡について考えてみたいと思います。もともと鏡は、日本では弥生～古墳時代に中国から伝えられた(日本でマネをした数種もある)青銅製の丸い鏡でした。この形態は、鎌倉・室町期まで続きますが、室町時代末期になると中国の影響を受け円鏡に「柄」をつけた「柄鏡」が登場します。桃山時代になりますと鏡の裏面の絵の横に「天下一」の銘が付けられます。江戸初期になりますと裏面の絵が図案的なものから絵画的なものになってきます。

中期になりますと大型の柄鏡が登場し直径約20センチ以上のものが主流となってきます。これは、元禄～宝暦の頃の女性の髪型の大型化によるものといわれています。

やがて、後期になると柄鏡は、広く一般庶民の必需品となり大量に生産されるようになり、作者銘は「天下一・国銘・氏名」と長いものが好まれ、柄も短くなります。やがて明治初期にヨーロッパからもたらされたガラス鏡に取って代られるようになります。

寄贈されました柄鏡は、裏面に「天下一伊予守吉重」と鏡師の名前が長々と刻されている点と柄が太く短い事を考えますと江戸後期～幕末期のものとして想定されます。



(寄贈された柄鏡と刻銘)

## 郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

22年に完成する本校の「郷土史料館」に収蔵する柿生・岡上に関する歴史的資料を探しています。ご自宅で保存されている史料(古文書や生活道具類)でお譲りいただけるものや、一時、お貸しいただけるものがございましたらお知らせください。しっかりとした管理体制で収蔵します。よろしくお願ひいたします。

### このような史料はありませんが

- ◎古代の「縄文土器・弥生土器」「石器」「土師器」「須恵器」
- ◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」・地域の「絵地図」
- ◎江戸時代の「高札」(慶応4年の太政官布告「五榜の掲示」など)
- ◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した教科書・手本「各種往来物」
- ◎江戸時代の「藩札」「通行手形」
- ◎明治期発行の「地券」 ◎明治期の「自由民権運動」史料
- ◎明治・大正・昭和(戦前・戦中)の「国定教科書」・「新聞」
- ◎小型の農具「千歯こき」「備中鎌」「からさお」
- ◎各時代の「古銭」「生活古民具」(矢立て・印籠・火打ち・鏡・装束など)
- ◎その他各種史料「各種古文書類」「美術品」

寄贈・寄託していただける史料がありましたらご一報ください。

柿生中学校 044-988-0004 黒川まで

町内会・自治会を通してお願い文を配布したり、柿生郷土史料館設立準備委員が直接、地域をまわり、お願いにあがります。ご協力お願い致します。